

高大連携の一つ試み

大学社会学部教育文化学科教授

沖田 行 司

同志社大学では受験生に学部選択を促進する入学準備講座や出張講義など、さまざまな高大連携事業を展開しつつある。今回社会学部教育文化学科と滋賀学園高等学校との連携事業は大学が実施してきた高大連携事業と少し様相を異にしている。一学科が研究と教育の両面から、相互に一定の教育目的と効果を設定して、高等学校の教育と連携事業を推進するのは、あまり他に例を見ないものである。

高大連携とは

高大連携とはもともと大学における「学修」を高等学校の単位として認定する制度として始まった。この制度は、高等学校の生徒の能力や適正、学ぶ意欲や関心に応じた進路選択を支援する役割も期待された。一方、大学にとっては、入学してくる学生の基礎学力の低下や、大学で学ぶ目的意識の希薄化など、大学が抱える問題への取り組みの一環として高大連携事業を積極的に推進しようとする動きとして出てきた。さらに、18歳人

口の減少という状況の中で、重要な広報戦略として高大連携を位置づけようとする考えも一般化してきている。たとえば大学紹介を兼ねた出張講義やオープンキャンパスと模擬授業などは、重要な広報戦略として認識され、国立大学を始め多くの大学で採用されている。高等学校に人物が学力ともに優れた生徒の推薦を依頼する指定校推薦制度も広義の高大連携といえるであろう。

教育文化学科では推薦入学の対象となる高校の選定にあたり、同志社大学への入学実績や偏差値の高い高校へ推薦を依頼してきた従来の方式を改め、新しい試みの教育を実践している高等学校に着目し、そこから同志社大学で学びたいという意欲のあるユニークな学生を迎え入れようという方向に指定校推薦を見直した。

滋賀学園高等学校との連携

滋賀学園高等学校は2004年度から3年間、文部科学省のてきた結果、覚書を交わして、新しい形の高大連携をスタートすることに合意した。

連携事業の内容

今回の連携事業は単発的な講義や学部・学科の紹介ではなく、教育文化学科を構成する教育文化学と生涯学習の二つの柱から中心となる専門科目をそれぞれ6回にわたり滋賀学園高等学校で講義をする。受講生は主として1～2年生で、選ばれた40人ほどの、生徒が対象である。この他にも、オープンキャンパス等の機会を利用して、同志社大学で2回ほどの講義に参加する。これらの講義を通して、大学の専門教育の基礎的な知識と経験を高等学校の生徒に提供する。さらに、専門の講義を再構築しながら、高等学校の先生方と共同して、各教科の学習動機と教育効果を高めることができるような高等学校の教育課程との連携を目指したいと考えている。この連携を通して、生徒だけではなく、広く父兄にも同志社大学への関心を深めてもらいたいと考えている。

「湖国を舞台に始まった『同立戦』に期待する」（『滋賀報知新聞』10月20日社説）というように、地域の人々の関心を集めているが、この小さな試みが滋賀県の教育の活性化に繋がることを期待している。

スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール（SHIH）の指定を受け、英語教育の充実に力を注ぎ、「真の国際人」の育成を教育理念に掲げ、個性的な教育を展開している。このプログラムには大学言語文化教育研究センターの先生方がアドバイザーとしてかわり、既に一定の高大連携の成果をあげてきた。

ところで近年の少子化の影響を受けて、受験生の確保と生き残りのために、多くの私立高校ではさまざまな試みをおこなっている。なかでも大学受験のための偏差値教育に特化したコースの設置は、生徒の確保を目指すために一般的に用いられる方法である。こうした状況にあつて、国際人の育成という教育理念を掲げて、英語教育をはじめ教育の充実を図ろうとしている滋賀学園の教育方針は、私たちの学科にとって極めて魅力的で強い関心を呼び起こした。

教育文化学科では教育学専攻から教育文化学科へと名称を変更した際（2005年文学部改組・再編、社会学部設置時）に、「文化における人間形成」に研究と教育の視点をおく新しい教育学研究の方向を打ち出してきた。とりわけ「文化交流と人間形成」にかかわる諸問題を取り扱う学科としては、従来の教育学研究とはかなり異質な教育内容とカリキュラム編成を有している。そこで、単に推薦依頼をするのではなく、教育文化学科の特性を十分に理解した上で、「国際人の育成」を目指す大学の専門教育と滋賀学園高等学校のカリキュラムとの連携によって、推薦入学の質を高めることが出来るのではないかと考えた。このような見地に立つて、両者が長時間にわたって協議を重ね

学生と教員の「幸せな出会い」をめざす導入教育

—文部科学省の「特色GP」に商学部の導入教育が採択—

大学商学部 教務主任 谷 本 啓

近年、各大学では新入生を大学の学習環境に適應させるための多様な取り組みが展開されている。同志社大学も2004年より各学部で導入教育に取り組んできた。その中で商学部の導入教育の取り組みが平成19年度の文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」（特色GP）に採択された。特色GPではこれまでも同志社大学の取り組みが4件採択されているが、それらはいずれも全学的取り組みであった。今回初めて学部単位での取り組みが採択された点は特筆すべきである。

商学部の導入教育の取り組みは導入教育と入学前教育とをリンクさせていること、教育効果の測定にもとづくきめ細かな改善に取り組み、教育内容を発展させてきていること、とりわけ導入教育を担当する教員のスキルアップや教育活動の共同化に意欲的に取り組んでいることや導入教育に専念する任期付教員を活用していることなどがGPの審査で高く評価された。

入学前教育と導入教育の結合

商学部の導入教育科目には1年次春学期の「アカデミック・リテラシー」（AL）と秋学期の「ビジネス・トピックス」（B

T）の2科目（各2単位）があるが（表1参照）、いずれも履修を強制せず学生の自主的な選択履修にまかしている。履修者の割合は開始初年度の2004年度には30%であったが、年々高まり、2007年のALでは96%に達した。授業内容が学生のニーズにマッチしており、受講者の授業評価ポイントも高い科目だということが新入生に認知されてきたことが履修率上昇の背景にあるが、入学前教育と導入教育とを結合させていることがもう一つの要因である。

商学部では2007年度入学生から推薦入試等の合格者を対象とする「入学前教育」を開始し、2006年度からは対象を一般入試合格者も含めた入学予定者全員に拡大させた。そして、入学前教育を通じて入学後に導入教育科目を履修するように促してきた。さらに2007年度入学生からは入学前教育で提出された課題レポートを入学後に導入教育科目の授業中に返却することにし、レポートの書き方を指導する教材として活用することにした。こうしてほとんどの新入生が自発的に導入教育を受ける状態が生み出されてきた。

「幸せな出会い」—自発的履修者とスキルある教員の結合

商学部が導入教育科目を選択履修制にしているのは、導入教育を必要とする新入生と導入教育のスキルをもつ教員とがクラスで「幸せな出会い」を果たせることをめざしているからである。まず学生に関しては、新入生の導入教育に対する適合と成熟の状態（レディネス）を考慮した。全学生に履修を義務づけ不本意出席者が増えた場合、授業効果の減退が予想される。そこで図1に示すように教員の教育スキル向上（②から④への移行）を先行させ、それをふまえて学生のレディネス向上（③から④への移行）を第二段階として目ざすということである。

教育スキルやノウハウを全担当者が共有

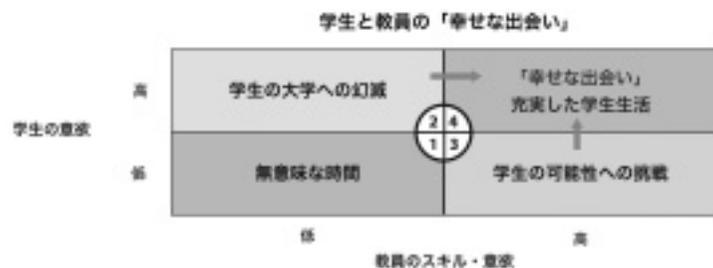
導入科目担当者のスキルアップはOJT型（On-the-job Training）FD（Faculty Development）により追求した。最初は試行的に少数のクラスを開設して、導入教育の経験を学部として組織的に蓄積した。そして担当者全員による授業実践交流会を毎学期ごとに開催し、全担当者が各クラスでの授業実践を発表・交流してきた。これが導入教育のスキルやノウハウを全担当者に普及させ、導入教育に対する学生の授業満足度がどのクラスでもおしなべて高いという好結果を生み出した。こうした多くのクラスで「幸せな出会い」が実現されたと、商学部では評価している。

商学部は1学年800人以上の学生を抱えているが、この経験は大規模学部における教育の組織的改善のあり方に関して、ひとつのモデルを示したといえるであろう。

表1 商学部の導入教育（初年次教育）科目（2007年4月1日 現在）

アカデミック・リテラシー (AL)	大学に必要な学習スキルを習得・体験することを目的とした科目。大学の施設利用に関する説明、文献検索と資料の収集方法、レポート・論文の書き方、討論の技法、プレゼンテーション等の発表の仕方など。
ビジネス・トピックス (BT)	工場や企業の見学などビジネスの現場で「学ぶ」フィールドワーク、ビデオ教材などの活用、実務家をゲストスピーカーとするなど多面的な教育活動を行う。最新のビジネス情報に触れることを通じて、商学部学生としての学習意欲の向上と問題意識の喚起をはかる。

図1



いわゆる「数学嫌い」を減らすには？

理工学部数理システム学科准教授 溝 畑 潔

1 「数学嫌い」は何故増えるのか？

数学というのは、どうも「嫌い」になる人が多い学問のよう
で、小中高では学年が高くなるほど数学嫌いが増えていきます。
その原因は簡単で、「わからなくなるから」です。数学は一カ
所わからなくなると、その先がどんどんわからなくなるとい
やつかいな性格があります。これは例えば、テレビでドラマを
毎回見ていたのに、途中で何回も見逃すと、ストーリーがさっ
ぱりわからなくなり興味を無くして見なくなるのとよく似てい
ます。

しかしここで断言したいのは「数学は役に立ち、面白い学問
である」という事です。現在の科学技術世界は数学なしには機
能しませんし、数学無しでは、世界を理解することはできませ
ん。更に問題を解決した時の特別な知的感動は得がたいほどの
ものです。

にもかかわらず、多くの学生がちよつとした「つまづき」か
ら数学嫌いになるのは残念なことです。なかにはそれを「武勇
伝」にして「私は今まで数学が私の人生に役立ったことは無い」
と公言する大人もいます。

2 「つまづき」のはなぜ？

おそらく小学低学年の「掛け算の九九」で数学嫌いになる生
徒は少ないと思いますが、学年が高くなると少しずつ数学嫌い

近いのでいいのですが、これがそのまま日本に伝わり使われま
した。そして戦後、漢字制限で函は駄目という事で関数となり
ました。これでは機能というイメージが無く、整数のような数
の一種と勘違いされたりして中学生がつまづく原因となりまし
た。このように西洋生まれの近代数学を日本に導入すると、翻
訳すると元の意味がわからなくなり、イメージがわかずにつま
づく場合がよくあります。

「関数」以外では「虚数」もよく誤解される表現です。「虚」
というのは「中身が無い、実が伴わない、空っぽ」という意味
で「虚言、虚名、虚説」のように負のイメージで使われていま
す。従って虚数は「あるようで実体のない数」で幽霊のような
イメージとなります。ところが虚数の元々の表現は
「imaginary number」であり、「想像上の数」という意味です。
（フカルトが馬鹿にしながら命名したといわれています）
「imaginary」は「imaginary enemy」（仮想敵）のように「実
際には存在しないが、あると仮定すると便利な」という意味が
あります。ところが「虚数」だとイメージが悪く、「このよう
な幽霊みたいな数を高校生に教える必要は無い」と大真面目に
主張する先生がおられるほどです。先進国の中で日本が飛びぬ
けて数学嫌いが多いのはこのような「翻訳の難しさ」があるの
かもしれません。

3 「数学嫌い」でなくなるには

数学は山登りと同じで、最初は頂上が全く見えない暗い森の
中を黙々と長時間歩きます。その時に「しんどい」ポイントで
「つまづかず」に歩き続けると突然視界が開け、頂上が見えて
きます。その時の快感は素晴らしいものです。頂上に立つと眼
下に今まで歩いてきた森や道がよく見え、「ああ、あそこが苦
しかったなあ」という所がよく見えます。更に頂上からは新た
な山々がよく見え、「よし、次はあの山だ」ということになり
ます。

が増えていきます。特に中学になると「方程式」「関数」「グラ
フ」など、少し抽象的な概念が導入され、数学嫌いが一気に増
えます。これらがあたかも「数学は偉い人間にしかわからない
学問」という誤解を与えるのです。しかし少し見方を変えると、
これらの概念が実はある必要のために先人達の泥臭い努力の結
果として生まれたことがわかります。

例として「関数」を取り上げてみましょう。関数は英語で
functionといいます。これは英和辞典で引くと「機能、作用、
働き」という意味で、例文としてthe function of the heart
（心臓の働き）が書いてあります。同様に、「xの関数」という
のは「function of x」と表現します。直訳すると「xの機能」
となります。例えばxにある数を入れると、その数から1
を引いてyをつくるという機能を考えてみましょう。それを
 $y=x-1$ と表し、1を引くという機能（function）を数学では
function（関数）と呼びます。いわば「ある数を入力すると、
1を引いた数を出力する機械または箱（ブラックボックス）」
のようなものです。これを最初に思いついたのはライブニッツ
です。微分積分を考えるときに関数を用いたのは非常に便利にな
ります。更に現在使われている $f(x)$ という形に表記したのはオ
イラーです。ところが中国人がまずfunctionを関数と訳しまし
た。函には「函谷関」のような箱のような意味があり、発音も

ところがふもとの林の中でつまづいて引き返すと「ふん！全
く無駄な苦労ばかりした！頂上なんて何にも見えない！馬鹿馬
鹿しい！」と「数学嫌い」になります。「数学嫌い」を直すに
は「つまづいた」ポイントに引き返しそれを乗り越えて進むこ
とです。でもやっぱりわからない場合はわからないまま進む
やらに進むことです。たくさん例をおぼえながら高い場所まで
登ると突然視界が開けます。そこから「つまづいた」ポイント
を上から眺めていると「なんだ、こんな所がわからなかったの
か」という事になります。

もし学生なら、「つまづいた」ポイントについて先生に聞く
といいと思います。この時、「何もかも全くわからないから最
初から教えて欲しい」と言われると先生も嫌がりませんが、「自
分はここまで登ってきたので、ここについて教えて欲しい。で
きたらわかりやすい例を教えてください」とたずねると先生も喜
んで教えると思います。もう学生でないなら、学生時代の教科
書等を読み返しても良いし、あるいは書店で数学の啓蒙書を買
って読むのもいいと思います。最近、桜美林大学の芳沢光雄教
授が「算数・数学が得意になる本」（講談社現代新書）や「数
学的ひらめき」（光文社新書）など興味深い本を執筆されたの
で、興味があれば是非一読してください。

4 数理システム学科の誕生

2008年4月、同志社大学理工学部数理システム学科が
誕生しました。この学科には、代数幾何学の専門家から大手金
融機関で統計学を駆使して活躍しておられた先生まで幅広い分
野の専門家が集まりました。この学科の目標は数学を身につけ
社会の幅広い分野で活躍する人材を養成するとともに、上記の
「数学嫌い」を減らす「数学が好きな」人材の養成も目的とし
ています。詳しいことは<http://mathsci.doshisha.ac.jp/>に紹介
があるので、是非のぞいてください。

フィールドワークの教育効果

—社会調査実習「京都伏見日本酒クラスタ研究」の取り組みから—

大学技術・企業・国際競争力研究センターCOE特別研究員 河 口 充 勇
大学社会学部准教授 藤 本 昌 代

本稿では、大学社会学部社会学科での教育研究活動の取り組みから、教育現場にフィールドワークと呼ばれる調査手法を持ち込むことよって得られる教育効果について論じる。

社会調査実習「京都伏見日本酒クラスタ研究」の概要

2005年4月、藤本と河口が中心となって伏見日本酒クラスタ研究を立ち上げるとともに、研究会と連動させながら、2年間にわたって社会調査実習「京都伏見日本酒クラスタ研究」（河口担当）を実施した。社会学科3・4年生43人が履修した本実習では、伏見の酒蔵を取り巻く産業・社会的連関構造（日本酒クラスタ）の持続と変化を記述・分析し、すでに2冊の実習報告書を刊行している。

それだけにとどまらず、本実習では、教育研究活動の一環として、産業界との連携による大学オリジナル商品企画（「純米大吟醸 七五三太」と「酒かすいっつ」シリーズ）を実施し、それを通して、我々は、文科系産学連携の新しいスタイル—「人を育てる産学連携」を模索した（詳しくは<http://www1.doshisha.ac.jp/~mfujinow/>を参照されたい）。

出会いの感動や発見の感動を覚えるとともに、そうした感動の機会を無償で提供してくれた協力者に感謝の念を抱くことになる。

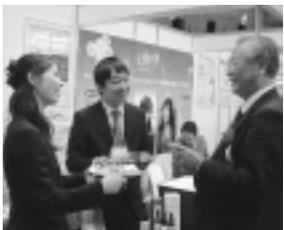
そのように感謝の念に行き着いた者は、短期間のうちに社会人マナーやフィールドワークの心構えを内在化させる。そうになると、もはや外圧がなくても、自らの行動を律するようになる。そして、彼・彼女らは、無償でご協力いただいた方々に対して報いるには、報告書を最良の形で完成させることが唯一の方法であるということに気付かされる。そうして、感謝の念は



インタビュー練習



酒蔵訪問



商品企画のPR



インタビュー本番

フィールドワークの教育効果

本実習は、学部学生の実習科目であるとはいえず、社会人を対象とした本格的なフィールドワークであるゆえ、社会経験の乏しい学生が行なうには様々なリスクがともなう。それゆえ、本実習ではまず2カ月をかけて社会人マナートレーニングを行なうとともに、フィールドワークの心構え（①いかなる作業も完璧であることが当たり前、②調査に協力いただく方々への感謝と気遣いを忘れてはいけない、③主体性こそがフィールドワークに絶対不可欠な要件である）をたたき込む。

そのような準備期間を経ているにもかかわらず、実際にフィールドに出ると、多くの履修生が極度の不安感・緊張感を覚え、思い通りに調査協力者と意思疎通できないことに愕然とする。しかしながら、緊張感から恐縮する若者の姿が協力者に否定的にとらえられることはほとんどない。たいてい協力者の側から助け舟が出され、そのおかげで、履修生たちは、支離滅裂になりながらも最後までインタビューをやりとげることができる。そうすると、彼・彼女らの多くは、事前に予想していなかった

いつしか責任感へと転換することになる。インタビュー後のデータ整理・分析、報告書作成は、どれもインタビューそのものより大きな労苦をともなう作業であるが、しかし、責任感という強力なエンジンが備わっていれば、モチベーションは長期間にわたり高いまま維持されることになる。

そのようにメンバー個々にフィールドワークとしての主体性が生まれると、ともにフィールドワークを行なう仲間への気遣いも大いに高まり、履修生たちの間に「戦友意識」が芽生えることになる。そうすると、一人の成長が他のメンバーへ派生しやすくなる。さらに、彼・彼女らの間で自然と分業体制が生まれ、集団全体に高度な自己組織性がみられるようになる。

「予期的社会化」の促進

そのように、本実習の履修生の多くは、はじめてのフィールドワークを通して、不安感・緊張感↓出会い・発見の感動↓協力者への感謝↓責任感の高まり↓主体性の確立という軌跡を経ってきた。換言するならば、それは、社会人一步手前の彼・彼女らにとつて「予期的社会化」の軌跡であった。

教育現場において、フィールドワークは、教員にとつても学生にとつても骨の折れるものである。しかしながら、フィールドワークは、地道な作業を厭わないフィールドワークを裏切らないものであり、かけた労力に値するだけの出会いや発見の感動を、そして、成長の機会を彼・彼女に提供するものなのである。

（注）本稿は、河口充勇「フィールドワークの教育効果」（『同志社社会学研究』第11号、2007年3月刊）の縮小版である。（筆者）

「きょうたなべ らんらんランド♪」

—「現代こども学科プロジェクト 2020 second」—

女子大学現代社会学部現代こども学科主任 濱口 義信

女子大学現代社会学部現代こども学科は2004年に開設され、第1期生が3年次になった2006年に、学生が主体となって、京田辺市内の小学生をキャンパスに招いて、楽しい、遊び感覚で参加できる体験学習イベントを企画した。内容は京田辺の特産品である竹を生かした「バンブー村出現!!」竹を五感で感じよう」というテーマで、竹を使った工作や料理などを体験するというものであった。

この第1回の成功を受けて、今年度の「現代こども学科プロジェクト 2020 second」が「きょうたなべ らんらんランド♪」と題して開催された(2007年12月2日)。

『らんらんランド♪』というテーマは『RUN! LAN! Learn!!』動く・つながる・学びとる』という二つの要素から作られた。つまり、参加することも学生の両者が、体を動かし、心を動かすことよってつながり合い、互いに学ぶことを、楽しみながら培いたいという願いが込められている。

京田辺市内9小学校の4年生以上に参加を呼びかけ、当日は200人近い応募者から抽選で選ばれた約100人が女子大学

京田辺キャンパスで1日を過ごした。

プログラムは次のとおり

I. オープニング (ヒバードホール)

らんらんランドのあいさつ練習、体を動かすゲームなど参加者同士のアイスブレイク、ウォークラリーへの導入(別々の学校のこども同士で活動グループを作る)

II. ウォークラリー

8、9人ずつの12のグループで、京田辺市にちなんだ五つのアトラクションを順番にまわってスタンプを集める。

1. コミュニット (Communication + Thoughtの造語)

一休寺に見立てた会場の伝達ゲーム

2. 竹やぶの中からみんなで協力して抜け出すすごろくゲーム

数あそび (すごろくジャングル)

3. ミュージカル

『ゴースト・ハウスで大発見! 隼人と一緒にみんなで

ダンス♪

4. ものづくり

竹を使った万華鏡づくり

5. ランチ

竹の子の入ったまき寿司づくり十食事

III. エンディング (新島記念講堂)

全体の振り返り。劇やリフレクションムービー(活動の様子などを編集したビデオ映像)上映、感想記入、全体のまとめ

「現代こども学科プロジェクト 2020 second」の特徴として何よりも強調しておかなければならないのは、これが学生の自主的な活動であるということである。それは、学生が計画を立案し、企画から準備、運営まですべて学生の手で行われていることである。学生が作成した企画書はA4用紙50ページに及ぶものがあり、財源についても、近隣のフリーマーケットや大学行事における模擬店の売り上げ、学生の会費などが基礎となっているという意味でも自主的活動としてこのイベントを運営していることとする学生達の意気込みがよく分かっていただけたと思う。学科はこのような学生の積極的な活動を側面からサポートする役割を果たしている。学生は必要に応じて各教員や事務室に相談し、相互に連絡を取りながら学生の活動を応援している。この活動の中心である学生と、サポートする教員や事務室との関係は、現代こども学科の普段からの密接な関係の上に成り立っていると考えられる。また、京田辺市教育委員会より今年度から後援を申し出ただき、市内の各小学校に参加を奨励して

いただいた。これも学生達の意欲と活動の質の高さが評価されている結果であると喜んでいる。

同志社教育のひとつの柱が「どうぶつ個體不羈」な学生の自立的成長を奨励することであることを思い起こすと、少し大げさかもしれないが、この「現代こども学科プロジェクト」はそのような意味で同志社にふさわしい教育の形なのではないかと思われる。

学生の自主的な申し出から始まったこの企画が、地元京田辺市との関連を深めさらに発展的に受けつがれていくことを願っている。

※こども学科による総合的に楽しい企画



一休寺を見立てた会場での伝達ゲーム



京田辺の竹を使った万華鏡製作

同志社幼稚園創立一一〇周年を迎えて

幼稚園教諭 岡田 幸子

幼稚園設立と歩み

同志社は新島襄先生の篤い思いで始まり、幼稚園は新島先生の志を慕って来日したデントン先生によって始めました。1897年6月24日にアメリカ人宣教師ミス・デントンが幼稚園を開設し、福音の種を蒔かれました。キリスト教の理念に基づいた建学の精神を受け継ぎ、一一〇年もの間幼稚園は守られてきました。その背景にはご父兄、卒園生、同志社教職員、同志社女子部同窓会、地域の方々等多くのご支援と神様の導きによって参りました事を感謝致しております。

創立一一〇周年記念会の開催

2007年11月10日、幼稚園創立一一〇周年の記念として、栄光館ファウラー講堂にて記念会を開催しました。当日は、法人事務部長の司会で、記念礼拝が行われました。幼稚園にとって、全園児90名の子どもの表情が、日々の保育の評価であり宝です。日頃、園を支えて下さっている学内外の来賓、卒園生

及び在園児保護者の方々をお招きし、園児の力によって、現在の幼稚園を発信することを目標に、園長以下全教員で企画、指導を行いました。

3歳児年少組にとっては、初めて親元を離れた入園から、集団での生活経験はわずか半年程です。様々な環境と新しい体験に出会うことを大切にしている時期を過ごしています。自分以外の友達の存在を認めながら、伝承遊びを口ずさみ踊る微笑ましい発表を行いました。4歳児年中組は、遊びが充実し自己を発揮する時代を生きています。創立記念を幼稚園の誕生日と捉え、共同製作した身丈ほどあるダンボール製の手作りケーキの前で、お祝いの歌と踊りを披露しました。幼稚園の最年長である5歳児年長組の子ども達は、音楽劇「オペレッタ」という表現方法を用いて、小さくても純粋な力をひとつに集結させました。ストーリーを保育者が語り、園児一人ひとりが登場する海賊や鳥等のイメージを膨らませ、友達の意見を聴き合い、時間をかけて舞台への道を共有できたことは、子ども達の持つ力を多くの方々に感じていただけたのではないかと思います。プロ



セスでは「共同性」を、当日は「一体感」を実感する事ができ、多くの方々から頂いた当日の拍手により、達成感を得て、またそれによって「自信」という力をつけたことを、子ども達の表情から感じました。

歴史を受け継いで

フィナーレは、園児、保護者、教員が一つになり、世の中で何よりも大切なもの：それは「愛」である…をテーマにしたミュージカルを演じました。一一〇年前、同志社の片隅に蒔かれた一粒の愛の種が、沢山の枝を伸ばし、これまでも多くの実が結ばれてきました。その背景には、多くの方々の「愛」のお支えがあったという事を今一度感謝し、ミュージカル出演者、また今回出演できなかった保護者も含め全員で共有できたことに深い意義があります。一貫教育体制の幼稚園としての重要な役割を担いながら、設立当初より大切にされてきた「神を敬愛し、人を愛し、自然を友とする」教育理念を改めて引き継いでいく所存です。これからも神様の愛の中で過ごし、神様の祝福が増し加えられますよう願っています。

